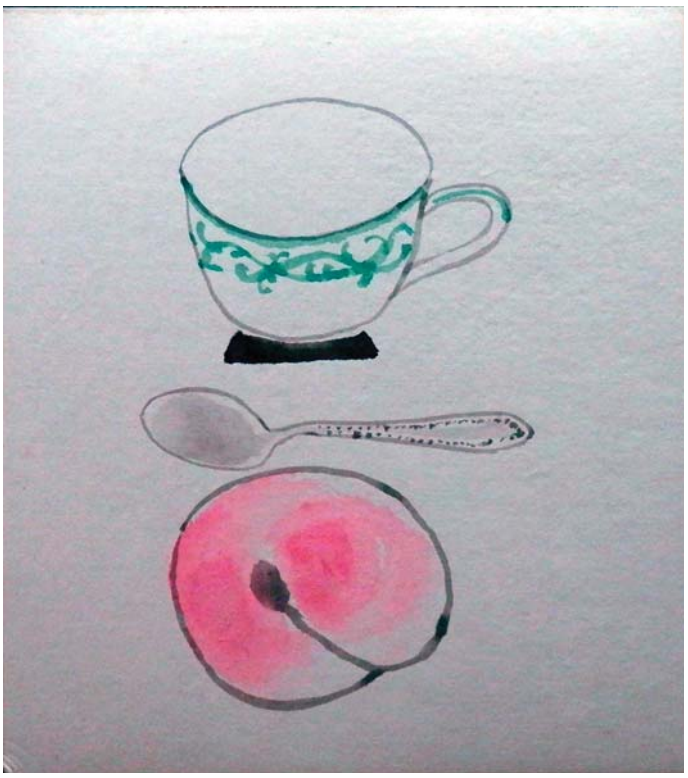
広報くっちゃん8月号NO.1003
平成24年8月1日発行

感動の場 一点

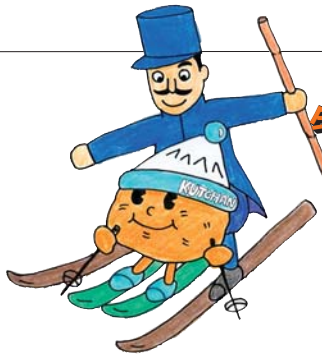
『静物』（色紙）

年不詳　小川原　脩　画



小川原が絵を本格的に描き始めたのは、旧制倶知安中学校3年生14歳の頃である。西村計雄らと「緑会」という絵画グループを作り、卒業まで数回の展覧会を開催した。その頃の作品は残っていないが、会場風景の写真を見る限り、当時描いた作品は静物・風景らしい。東京美術学校時代当初の作品も静物である。在学中から70歳代まで静物を描いているが、その主役は「桃」である。

作品を際立たせるものとして「林檎」を登場させた時代もあったが、「桃」の柔らかな曲線と淡い色調は、旧制中学校時代からそれほど変わっていないような気がする。「僕はね、君がこの時季に持ってくる桃が楽しみなんだよ」、とほほ笑む小川原を思い出す。



ふるさと探訪 353回

今年はスキー伝来100周年

あの時代（とき） この時代（とき）

その38『地元でスキーづくり』

■左から明治・大正・昭和のスキー

レルヒ中佐のエゾ富士以後、北大や小樽商大、さらには地元の人たちの間でスキー熱が高まってゆきました。鉄道と温泉と良質の雪、この3つの要素が一層スキー熱を高めたようです。とはいっても、スキーを一式購入するのは大変でした。前田克巳さんによると、昭和7年頃の購入金額は、靴、板、ストックあわせて12～3円だったそうです。羊蹄山麓地域でいち早くスキーづくりを行ったのは、東倶知安村（現京極町）でソリづくりをしていた芳賀藤左衛門（福島県飯坂町出身）さんで大正5年頃でした。大正12年2月、小樽で開かれた第1回全日本スキー選手権大会に腹掛け、ももひきのいわゆる人力車夫スタイルで出場した芳賀は、なんと3位に入賞してしまいました。各地から集まったスキーヤーとの交流を通じて自らのスキーづくりに役立てようとした結果でした。

倶知安では、六郷在住だった氏家敬次さんが昭和の初めごろにスキーづくりをしました。ちょうど一本杖から二本杖に変わるころで、金具はアルパイン式だったそうです。スキー板には羊蹄山をかたどった焼印が押されていました。

■発行・編集　倶知安町企画振興課広報広聴係 ☎0136-56-8001
公式WEBサイト http://www.town.kutchan.hokkaido.jp
✉ info@town.kutchan.lg.jp　■印刷　(有)旭太陽堂印刷